

## 「荒井図書館」の有する意味

新鶴村の基幹産業は、昔も今も変わらず農業である。しかし、昭和二五年当時八五パーセントだった農業人口も平成になってからは三〇パーセント台となり、深刻な後継者難の問題を抱えている。また、農業粗生産額も昭和五七年頃をピークに年々下降線をたどっている。国においても農村崩壊に対する危機感が高まっており、現在は、食糧・農業・農村基本問題調査会によって、昭和三六年に制定された「農業基本法」を見直し「新農基法」を策定するための論議がなされている。

その中では、農業は単に食糧を生産するのみならず、洪水の防止、地下水の涵養、都市住民の憩いの場の提供、生物や大気の保全など、さまざまな公益的機能を有することも話題となつている。農水省の平成元年度の試算によると、水田だけでも約一二兆円分の効果があり、同年のコメ総産出額三兆二〇〇億円を大幅に上回っており、これが「農民は勇敢な国土防衛隊」とする根拠である。

しかし、それは農業が受動的に持つ一面に過ぎない。もつと能動的なもの、人間が人間たる積極的な意味合いが農業にはあるのではないかと、といった論議も最近よく耳にする。中高年者の帰農増加や、都市住民の約四〇パーセントが農村移住を希望していること、そしてグリーンツーリズムもまた、その論議の視野に入っている。

確かに農村には、盆踊りや小正月といった年中行事、初冬の大根干しといった日常の生活景、田植えなどの作業景から醸し出される抒情的景観があり、それが疲弊した現代人に

佐賀瀬川荒井家の蔵



写真右——都会ではもうみられなくなった端午の節句の武者幟  
写真左上——道祖神を祭る正月の火祭行事 サイノカミ (佐藤文夫氏提供)  
写真左下——農村ならではの年中行事・正月の団子さし (佐藤文夫氏提供)



潤いを与えることは想像がつく。だがおそらくキーワードは「文化としての農業」にあるのではないだろうか。

古典経済学の始祖アダム・スミスは、その著作『国富論』の中で、農業労働は広い範囲の知識、技能を必要として、しかも日々の創意工夫が成果となつてあらわれる、きわめて人間的な労働と述べている。さらに、詩人・童話作家として有名な宮沢賢治の『農民芸術概論』には、「農民芸術とは宇宙感情の 地人個性と通ずる具体的な表現である／それは直観

と情緒との内経験を素材としたる無意識或は有意の創造である／それは常に実生活を肯定しこれを二層深化し高くせんとす」と、同根の思想が流れている。

文化を意味する「カルチャー」にはまた、「耕す」という意味もあるという。生物進化の盟主として君臨してきた人類は、経済至上主義による進歩史観を転換する必要性に迫られ、その活路を農業に求めようとしているかのように見える。農業詩人として宮沢賢治がクローズ・アップされる理由もそこにあるのだろう。